

19. 霊的な再生(「新しく生まれ変わる」こと)

ペテロの手紙#19

<https://ichthys.com/Pet19.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

はじめに：このレッスンでは、第一ペテロの手紙の本文の解説に戻ります。これまで私たちは、ペテロのあいさつの最後の言葉「恵みと平安があなただにますます豊かに与えられますように」(1章2節)をきっかけに、「霊的成長」というテーマについて、かなり長い時間をかけて学んできました。この言葉の中でペテロは、神の恵みが私たちにさらに増し加えられ、また心の平安が深まるようにと願っています。この「恵み」と「霊的な平安」はどちらも、霊的に成熟した信仰者に与えられる大切な実りです。ですから、ペテロがこれらを願っているということは、私たち一人ひとりが自分の霊的成長に取り組むときにこそ、その願いが実現するという意味でもあります。また、このあいさつの言葉は、そのすぐ後に続く3節から9節までの賛美(頌栄)と深くつながっています。霊的に成長する信仰者であるペテロは、今、自分がキリスト・イエスの中に持っている「生ける望み」を与えてくださった神をたたえています。もし私たちも同じように、霊的に前進し続けるなら、ペテロと同じようにこの「生ける望み」に心を向けることができるのです。

頌栄(3-9 節)：ペテロのこの部分は「ドクソロジー(doxology)」と呼ばれます。これはギリシヤ語で「神をたたえる言葉」「賛美の言葉」という意味です。ペテロはこの賛美の中で、神をたたえると同時に、読む人にとって大切な聖書の真理を教えています。2節の「霊的成長への願い」に続いて、この賛美の部分では、「徳に満ちた思考」の三つの中心的な柱が詳しく語られています。それは、神への賛美の形をとった信仰の賛歌の中に込められています。ペテロはここで、三つの主要なキリスト教の徳(信仰・希望・愛)を、希望 → 信仰 → 愛 の順に取り上げています。

3～5 節: 生ける望み(The Living Hope)

6～7 節: 苦しみが信仰を磨く(Suffering Sharpens Faith)

8～9 節: 愛の対象であるキリスト(Christ, the Object of Our Love)

[第一ペテロ1章3-5節の＜イクシス＞訳：](#)

私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はご自分の豊かなあわれみによって、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことを通して、私たちを「生ける**望み**」へと新しく生まれさせてくださいました。そして、**決して滅びず、汚れず、色あせることのない相続**を、天において私たちのために備えてくださっています。あなたがた自身も、神の力と、それを受け取るあなたがたの信仰によって守られ、時が満ちるときに明らかにされる、救い（**最終的な救出**）を受けることができるようにされているのです。

生ける望み：次の3節は、霊的な成長にとって大切な徳の一つ——「望み（希望）」——に、私たちの注意を向けさせます。これまでの学びでも見てきたように、「徳（virtues）」とは、クリスチャンの思いや行動を正しい方向に導くための、心の中の大切な焦点（フォーカス）です。徳に意識を集中させるとき、私たちは神の真理のさまざまな側面を、よりはっきりと理解できるようになります。徳はまた、日々の出来事をどう受けとめるかを導く「心のコンパス」となり、聖書の教えをその時その時に当てはめ、実際に生かす助けにもなります。たとえば「望み」という徳に心を集中するとき、私たちはこの世の退屈や苦しみを超えた、永遠の現実——つまり、神が約束してくださったすばらしい未来のこと——を、もう一度しっかりと思い出すことができるのです。

「望み」は、私たちの目をこの世のまやかしから離し、本当の命——天に備えられている永遠のいのち——に向けさせてくれます。聖書にはこの「望み」について多くの教えがありますが、ペテロは3～5節の中で、特に大切な三つの面に焦点を当てています。この三つは、ギリシヤ語の原文でも同じ形で並べられていて、それぞれが「新しいいのち」と結びつけられています。ペテロは、それぞれの面を前置詞 eis（エイス／へ、～に）で導き、神のあわれみによって私たちが「新しく生まれた」ことを語っています。私たちは神のあわれみによって生まれ変わり——

- 1) 生ける望み（リビング・ホープ）へ（3節）
 - 2) 朽ちることのない受け継ぎのもの（相続財産）へ（4節）
 - 3) 最後に現れる救い（究極の解放）へ（5節）
- と導かれているのです。

3節の「生ける望み」は、私たちが永遠のいのちを楽しむことになる復活のからだに目を向けさせてくれます。4節の「朽ちることのない受け継ぎのもの」は、虫もさびも損なうことのない永遠の報いを思い出させてくれます。そして5節の「最後に現れる救い」は、もし私たちがこの世で信仰を保ち続けるなら、最後のさばきの日にしっかり立つことができるという希望を与えてくれるのです（[詩篇 1 篇 5 節](#)参照）。

さらに、この「望み」の三つの面は、クリスチャンの人生における三つの変化([コロサイ 1 章 13 節](#)参照)に対応しています。ペテロ#13 の学びで見たように、これらの変化(または「聖化」)は、聖書が信仰者の「聖なる者」としての成長を説明するために用いている表現です。つまり、私たちが世的なもの(俗)から霊的なもの(聖)へと変えられていくということです。私たちはまず、キリストのうちにある立場によって「聖なる者」とされるところから始まります(これを位置的聖化といいます)。そして最後には、復活のときに新しいからだを受け、罪の影響が完全に排除されることで、完全に「聖」とされます(最終的聖化)。その途中の今の人生では、罪や堕落の影響を少しずつ手放しながら、「聖い生活」を生きる努力を続けることが求められます(経験的聖化)。この三つのうち、中間の「経験的聖化」は、私たちが日々どんな決断を下すかにかかっています。つまり、経験的聖化とは霊的成長そのものなのです。

5 節に出てくる「救い(deliverance)」は、今すでにイエス・キリストのうちにあることで与えられている安心と守りを示しています。これは、先ほどの説明で言えば位置的聖化にあたります。3 節の「生ける望み(living hope)」は、復活によって与えられる最終的な栄光の変化への確信を表しており、最終的聖化に対応します。そして 4 節の「朽ちることのない受け継ぎ(indestructible inheritance)」は、霊的な成長と、それにともなって生まれる信仰の実によって得られる報いの希望であり、これは経験的聖化を表しています。こうして、希望のそれぞれの側面は、キリストを愛し、この世の流れに染まらずに忠実に従う人々に与えられる、将来の祝福への確かな信頼を示しています([ローマ 8 章 28 節](#)参照)。私たちはこの世に合わせて生きるのではなく、神がそれぞれに用意してくださったご計画に従って、内側から変えられていくのです([ローマ 12 章 2 節](#))。

賛美(3 節)：3 節の「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように」という言葉で、ペテロはこれから書かれる祝福の言葉(賛美の祈り)において、その恵みを与えてくださった神ご自身に感謝と賛美をささげるように私たちを導いています。ここで「ほめたたえられる」と訳されているギリシア語の エウロゲートス (εὐλογεῖν / eulogetos) は、対応する動詞 エウロゲオー (εὐλογεῖω / eulogeo) とともに、新約聖書では常にヘブル語の バラーフ(בָּרַךְ / barach) —「祝福する」という言葉— の意味で使われています。このヘブル語のバラーフは、もともと「ひざまずく」という意味のベーレク(בִּרְכָּה / berekh / berech)(ひざ)という言葉から来ていると考えられています。旧約聖書では、神や目上の人に敬意を表してひざまずく姿勢が「感謝」や「賛美」と結びついていました。同じように、手を挙げて感謝を表す トダー(תודה / todah)=感謝 という言葉も、もともとは「手を上げる」という動作から来ていると考えられています。つまり、「祝福する(バラーフ / エウロゲオー)」とは、「相手をほめたたえ、善い言葉をかける」という意味なのです。神が人を「祝福する」ときには、その言葉とともに実際の恵みや助けが与えられることが多くあります。旧約聖書で、ヤコブやヨ

セフが人を祝福したときも、それは単なる願いではなく、神の預言的な力による祝福でした。今日、私たちが誰かを「祝福します」と言うときも、それはその人に神の恵みと守りがあるように願う祈りなのです。

ペテロが「神をほめたたえなさい」と勧めているのは、感情的な喜びの表現であると同時に、理性的・霊的な理解に基づく賛美です。この箇所では、感情と知性のどちらか一方だけではなく、両方が正しい形で結びついている点が強調されています。以下の2点が特に重要です。

- 1) この賛美は、節度のある範囲で行われるべきであり、意味のない空虚な感情ではありません。むしろ、それは確かな聖書の真理に基づいた喜びと感謝なのです。私たちは、なぜ神を賛美するのかを理解しており、その思いをしっかりとした根拠に向けています。こうして、聖書にかなった正しい思考を、感謝の感情によって支えています([第一コリント 14 章 18-19](#) 参照)。
- 2) ここで命じられている賛美は、私たちの注意を再び神に向け直すためのものであり、意識的で制御された感情の表れです。私たちの賛美の土台は、先に述べられた霊的成長の源であり、続いて語られる「生ける望み」の源でもあるお方、すなわち神への感謝と敬意にあります。感謝と賛美を神に向けることによって、ペテロは私たちの側に生じうる主観的な高ぶりを抑えています。私たちは自分の霊的な成長を省み、将来の希望の実現を待ち望む必要がありますが、それはあくまで神のご計画の一部であり、私たちはただその恵みによって参与しているにすぎないこと、そしてすべてが神の栄光のためであることを常に忘れてはなりません。

あわれみ(3 節)： [第 1 テモテ 1 章 2 節](#) ([第 2 テモテ 1 章 2 節](#) および [第二ヨハネ 1 章 3 節](#) と比較) で、パウロはペテロの手紙の冒頭のあいさつとよく似た形式で、「恵み、あわれみ、平安」があるようにと願っています。ここで「恵み」と「平安」に加えられている「あわれみ」という言葉が、ペテロのこの手紙でも 3 節に現れ、神が私たちに新しい命を与えられたときの神の心の態度を説明しています。あわれみとは、神が私たちを祝福してくださる際に現される「赦し」の側面を表す言葉です。一方、恵みと平安は、それぞれ神の与えること(恵み)と、私たちがそれを受け入れ、応答すること(平安)を意味しています。したがって、「恵み、あわれみ、平安」を祈るとは、神の祝福の全過程を呼び求めることです。すなわち、与える者である神の無償の恵み(恵み)が、イエス・キリストにおける赦し(あわれみ)を通して私たちに注がれ、それを受けた者が霊的に成長し、心の安らぎと充実(平安)に至る——この祝福の流れ全体を表しています。

この三つの言葉は、信仰、希望、愛という3つの主要な徳目にも対応しています。信仰は神の恵みを信じます。希望は神のあわれみを待ち望みます。愛は神の平和と一

体です。信仰は神の唯一の御子イエス・キリストの賜物に示される神の無償の恵みを受け入れるために手を差し出します(第二コリント 9 章 15 節; エペソ 2 章 5-9 節)。このように、神の恵み深い約束を自分のものにするのです(例えば、アブラハムが神の約束を信じて跡継ぎを授かったように:創世記 15 章 6 節)。希望とは、神のあわれみに基づくものです。それは、永遠の未来への確信——裁きからの救い、復活への参加——のことであり、イエス・キリストの犠牲によって示された神の赦しとあわれみを土台にしています(エペソ 2 章 4-5 節; ユダ 21 節)。神への愛、神からの愛は、成熟した信仰生活のしるしであり、神との愛の関係の中で生まれる「平安」をもたらします。この平安は、この世のどんなものにもまねることができず、理解することもできないほどの深いものです(ヨハネ 14 章 27-31 節)。

謙遜(けんそん)は、私たちが神の与える性質を正しく理解し、それに心を向けるうえで大きな役割を果たします。そして、信仰・希望・愛を、恵み・あわれみ・平和へとつなぐ橋のような役割を持っています。信仰は謙遜と切り離すことができません(第一ペテロ 5 章 5-6 節)。私たちが自分の問題を神にゆだねるとき、自分の力ではどうにもできないことを認め、代わりに神の恵み深く、惜しみなく与える性質に頼るのです(エペソ 2 章 8-9 節)。同じように、私たちの希望もまた、神のゆるし(つまり救い)が自分の行いによるのではなく、神があわれみによって私たちを救ってくださったという事実を、謙遜に、そして確信をもって受け入れます(テトス 3 章 5 節)。このあわれみは、神を正しく敬うへりくだった人に注がれます(ルカ 1 章 50 節)。最後に、ヤコブは真のクリスチャンの平和を、パウロが説明する「霊による愛の法」とほとんど同じ表現で語っています(ヤコブ 3 章 17-18 節とガラテヤ 5 章 14-26 節参照)。私たちは霊的に成長することによって平和を得(第一ペテロ 3 章 10-12 節)、謙遜をもって自分の悩みを主にゆだねることを学ぶとき(マタイ 6 章 25-34 節)、この世の心配ごとから心が解放され、他の人々に神の愛を映し出すことができるようになるのです。

霊的な再生(3 節):

イエスは答えて言われた、「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」。(ヨハネ 3 章 3 節)

イエスがニコデモに語られた言葉は、非常に強い意味をもった断言です。そのことは、イエスがヘブライ語での厳粛な表現「アーメン」(直訳すると「まことに」=真実であり、信頼に値するという意味)を二重に用いていることから分かります。＜訳者註:上記の節の中の日本語の「よくよく」は原語で「アーメン アーメン」となっています＞つまり、「新しく生まれなければ」永遠の国、すなわち神の国に入ることはできない、というのです。永遠の世界に入るためには、私たちの中に大きな変化が必要です。最初に肉体

の命として与えられた「いのち」だけでは不十分なのです。私たちは「新しく生まれる」ことによって、イエス・キリストへの信仰からのみ与えられる新しいいのち、すなわち永遠のいのちを得なければなりません。今の私たちの体は地上のものであり、血と肉による存在です。そのままでは、神の永遠の国に入ることも、そこにとどまることもできません([第一コリント 15 章 50 節](#))。この新しいいのちを受け入れるためには、新しい体が必要なのです。イエスが「新しく生まれること」と「神の永遠の国に入ること」とを直接結びつけて語られたのは、この真理を示すためです。「新しく生まれる」とは、肉によってではなく、御霊(みたま)によって二度目に生まれることです([ヨハネ 3 章 6 節](#))。そのとき、私たちは「立場として」すでに新しいいのちを持ちます。つまり、イエス・キリストのうちにある確かな立場を通して、その新しいいのちを完全に受け継ぐ権利が与えられているのです。しかし、私たちはまだそのいのちを完全に体験しているわけではありません。新しいいのちを完全に経験するのは、復活のときです。そのとき、私たちは新しい体を与えられ、内にある新しいいのちと完全に一致するのです。復活の体こそが、この新しいいのちを宿す新しい「すまい」です。ですから、「新しく生まれる」とき、私たちはすでに新しいいのちを与えられ、やがてそのいのちにふさわしい新しい体を必ず受け取るという確信を持つのです。そして、この「新しく生まれる」ことこそが、神の国に入る確かな保証なのです。

キリストがこの文脈で語っておられる「新しく生まれる(ボーン・アゲイン)」とは、私たちがキリストにあって持つ新しい命、すなわちイエス・キリストを信じ、キリストとひとつに結ばれることによって今すでに与えられている永遠の命のことを指しています。そしてこの命は、私たちの今の肉体が復活の時に不滅の体へと変えられる時に、完全に経験することができるようになるのです。したがって、私たちは最初の誕生によっては死に定められていましたが([ローマ 5 章 12-14 節](#); [第一コリント 15 章 22 節](#); [ヘブル 9 章 27 節](#); [詩篇 51 篇 5 節](#))、イエス・キリストを信じる信仰によって「新しく生まれ」、死(すなわち裁きと第二の死の危険)から命(永遠の命)へと移されたのです。この命は今すでに与えられており、やがて復活の時に完全に実現します([ヨハネ 5 章 24 節](#); [ヨハネ 第一 3 章 14 節](#))。ですから、「新しく生まれる」とは、新しい第二の命——すなわち、神がその御子を信じるすべての人に与えてくださる永遠の命を持つということです([ヨハネ 3 章 15-16 節](#))。信者である私たちは、この永遠の命を今ここで「地位的に」(すなわち、イエス・キリストに結ばれた者として確かな権利をもって)持っています([第一ヨハネ 5 章 13 節](#))。そしてこの命は、将来、私たちの朽ちる体が不朽の姿に変えられる時、「経験的に」完全に与えられるのです([第一コリント 15 章 53-55 節](#))。このように、「新しく生まれた」私たちは「新しい被造物」です([第二コリント 5 章 17 節](#); [ガラテヤ 6 章 15 節](#); [エペソ 2 章 15 節](#), [4 章 24 節](#))。私たちは信仰によって神のことばに従い、今すでに新しく生まれています([ヨハネ 3 章 36 節](#))。そして同時に、神が約束してくだ

さった新しい体を得て、永遠の命の実りを完全に味わう未来を待ち望んでいるのです。

このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。(コロサイ 3 章 1-4 節)

私たちが持っている永遠の命は、神のもとに「安全に隠されて」います。やがて、私たちの希望である主イエス・キリストが、再臨のときに栄光の姿で現れるとき、私たちもまた栄光をまとい、新しい永遠の体という、永遠の命を宿す不滅の器を身にまとうことになります。したがって、この前の箇所には、新しい誕生の二つの要素——すなわち、今すでにキリストにあって持っている「地位的な」新しい命と、将来、復活を通してそれが完全に実現するという要素——の両方がはっきり示されています。

聖書のほかの箇所でも、このテーマについて語られており、キリストにある私たちの新しい命のさまざまな側面が示されています。この新しい誕生の「手段」となっているのは、神のことばです。[ヤコブ 1 章 18 節](#)には、神が「真理のことばによって私たちを生まれさせた」と書かれています。それは、私たちが「初穂」となるためです(これは、やがて来る復活を指しています。[第一コリント 15 章 23 節](#)参照)。この手紙の後の箇所([第一ペテロ 1 章 23 節](#))でも、ペテロはほぼ同じことを語り、「滅びる種からではなく、朽ちることのない種から、神の生きていつまでも残ることばによって生まれた」と述べています。神のことばが永遠に残るように、その永遠のまことの種を今、内に持つ私たちもまた、その種が芽を出し、やがて私たちの永遠の住まいとなる驚くべき体に花開くのを見ることになるのです([第一コリント 15 章 35-41 節](#))。「神の種がその人の内にある者」の確かな安全は、ヨハネによっても語られています([第一ヨハネ 3 章 9 節](#))。それは、キリストの福音といういのちを与える真理の種が、私たちの内に永遠の命の保証として置かれているということです。私たちが彼を信じ続けるかぎり、この真理は私たちの中にある種であり、復活の時に、永遠の命が必ず芽を出すことを保証しているのです([第一ヨハネ 4 章 7 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 4 節](#), [5 章 18 節](#)参照)。

第一ペテロのこの節が語るように、神はそのあわれみによって「生ける望みへと新しく生まれさせてくださいました」。私たちの望みは、復活と永遠の命によって死を打ち破ることです。罪のゆるしへの道を切り開いてくださったイエス・キリストのあがないのわざ

を信じることによって、私たちはすでに今、祝福された復活の保証である永遠の命を持っています。御霊の救いの働きによって、私たちは「新しくされ」「新しく生まれた」のです([テトス 3 章 5 節](#))。私たちは一度だけ生まれた者ではなく、その結末が死で終わる者でもありません。むしろ「新しく生まれた」者であり、その結末は永遠の命です。その命は今すでに私たちのものですが、その完全な実現は、やがて来る復活の時に現れるのです([マタイ 19 章 28 節](#))。

私たちが「新しく生まれた」と言われているのは、まさにこの復活と報いの望みのためです([第一ペテロ 1 章 3 節](#))。この望みこそが、私たちが天にしっかりと結びつけ([ヘブル 6 章 19 節](#))、思いを上にあるものへと向けさせるのです([コロサイ 3 章 1-4 節](#))。また、この望みこそが、いつか与えられる新しい天のいのちを見つめながら、今この地上の生活を新しくするよう私たちを促すのです([エペソ 4 章 22-24 節](#))。

ペテロが「新しく生まれた」と言うとき、それは私たちが永遠のいのちを受け取ったという意味です。そして、その新しいいのちによって生まれた望みとは、今すでに信仰によって与えられているこの永遠のいのちが、やがて復活によって完全に現れるという望みです。すなわち、この地上の体が新しい永遠の体によってよみがえり、私たちが永遠に神とともに生きるようになることです。そのとき、「死は勝利にのまれる」([第一コリント 15 章 55 節](#))という言葉が実現します。つまり、キリストへの信仰によって、復活の力が死に打ち勝つのです。この新しい誕生(そして[エペソ 1 章 13-14 節](#)にあるように、聖霊の保証)によって、私たちはその未来の現実に対する確かな保証を与えられています。次の学びでは、この復活について聖書がどのように語っているかを見ていきます。

霊的な再生と新しく生まれ変わることについてより詳しく知りたい方は、次のリンクを参照してください<未翻訳>。[BB 4B: Soteriology, section II.7, "Spiritual Rebirth".](#)

[ペテロ #20 「復活」に続く]